

# 競技スポーツにおける自死に関する一考察 —円谷幸吉を事例として—

スポーツ文化研究領域

5006A016-6 岡部祐介

研究指導教員： 友添秀則教授

## 本研究の目的

トップアスリートといわれ、競技力の向上や競技における勝利を目的としてスポーツに専門的に従事する競技者は、勝利によって物的な利益だけではない、他では得ることのできない栄光を得ることができる。それによって自己の存在意義を見いだすことができ、社会的にも認知されているといえる。

しかし、スポーツの暗部に目を向ければ、競技における敗北や挫折によって勝利から遠ざかることで、競技者としての自己の存在意義を見いだすことができなくなることがある。それが深刻な場合には、社会的にも自己の存在を抹消してしまうことが考えられるであろう。その究極的なかたちが死であるとするならば、その典型例に「もう走れません」といって自殺した円谷幸吉を挙げることができる。

円谷を死に至らせたものは何か、また、どのようにしたらその死を避けることができたのかというように、円谷の死の意味を問うことは、当時のスポーツに関わる問題を明らかにすることであり、その意味の内実が、望ましいスポーツのあり方や人間とスポーツの関係を再考する必要性を示すものであると考えた。

そこで、本研究では円谷幸吉の自死に着目し、その死がもつ意味を明らかにすることを目的とし、以下の手順で考察を行なった。

1. 「円谷幸吉物語」、聞き取り調査における関係者の証言、資料や文献における言説、円谷の遺書に関する言説をまとめ、円谷の生涯や人間像、陸上競技観、自死につながったと考えられる要因を明らかにする。
2. 円谷の自死という事象と、1で示された円谷の自死の要因とされる事象との因果関係を明らかにする。「オリンピック主義」を掲げた戦後スポーツ体制の変容過程と当時の競技者の養成・強化について考察し、これらが円谷にどのような圧力となったのかを明らかにする。
3. 1、2の考察の結果から、円谷の自死が示す意味を明らかにする。

## 本研究の方法

本研究は、円谷幸吉の自死という事象を、他の諸事象との関連で解釈し、その意味を明らかにする解釈学的研究である。円谷の自死に関連する諸事象の検討については、円谷の生きた時代、特に 1964(昭和 39)年の東京オリンピックを中心とした戦後スポーツ史、円谷幸吉に関する資料、文献を対象とした。また、円谷幸吉に関する言説については、新聞や雑誌

の記事にあたり、関係者への聞き取り調査も行なった。

## 第 1 章

福島県須賀川の農家に生まれた円谷は、父の幸七に土着の農村的倫理を教え込まれた。やがて兄の喜久造らの影響で走ることに興味を示し、須賀川高校 2 年から本格的に陸上競技を始めた。自衛隊へ入隊後も陸上競技を継続し、飛躍的な成長をみせ、日本を代表する競技者となった。そして東京オリンピックマラソンで銅メダルを獲得した円谷は、一躍「国民的英雄」となった。その後は、周囲から期待されながら競技成績は不振に陥り、走れない身体と求められた「英雄」像との間で苦悩した。最終的には自死というかたちで人生に終止符をうった。

円谷の人間像については、真面目さや責任感の強さが特徴的であり、「規矩の人」といわれたように、制約や限界のもとで、それに忠実に従うことで存在感が際立つと考えられた。円谷の陸上競技観については、精神主義的傾向が指摘された。

円谷の自死については、円谷を取り巻いた環境、すなわち「オリンピック主義」を掲げたスポーツ体制や選手強化システムが社会的要因として考えられた。また、規矩といわれた円谷の人間性や、人間関係において孤独な立場におかれていった境遇、そして競技における成績の不振といったことが、自死の私的要因として少なからず影響を与えていると考えられた。また、円谷の遺書については、百姓の人間としての円谷の土着的精神性が浮き彫りにされた。このような人間性が、競技者としての円谷と対比的に捉えられた。

## 第 2 章

1945(昭和 20)年の敗戦から、日本のスポーツは占領軍による「民主化」「非軍事化」政策の下で復活し、体協を中心にスポーツの「民主化」「大衆化」路線を示し、再出発することとなった。しかし、占領政策の転換によってスポーツの国際復帰が実現し、再びオリンピックを目指した勝利至上主義、少数精鋭主義のスポーツが主流となり、「オリンピック主義」のスポーツ体制へ転換していった。

東京オリンピック開催が決定すると、体協を中心に行政の整備も進められていった。そのなかで、1961(昭和 36)年に成立したスポーツ振興法は、国民大衆へのスポーツ振興という建前とは別に、「オリンピック主義」を後押ししていく役割をもった。1960(昭和

35)年の日米安保条約をめぐって国民大衆の大規模な反対闘争が起こるが、池田内閣は所得倍増計画による高度経済成長政策を打ち出し、高まった国民大衆のエネルギーを国家主義と結合させ、国民大衆の自覚や思想形成のために利用していった。このような状況下で、東京オリンピックはその成功が求められ、国家的事業として位置づけられたといえる。

体協を中心としたスポーツ機関は、政治や経済、教育等と結びついてオリンピック体制の確立を目指すうえで、円谷をはじめとしたオリンピック代表選手を国民大衆から遊離させて体制内化していく役割を担っていた。東京オリンピックに向けては、政治、経済、その他の思惑に迎合するかたちで、高度化を突き進み、スポーツの祭典を実現にいたったのであって、真に国民大衆のためのスポーツとはならなかったといえる。競技者の立場からすれば、国民大衆とは隔離された政治権力やスポーツ体制の下に自己を規定していかざるを得なくなったと考えられる。円谷も、このような状況下で競技スポーツに関わっていった。

### 第3章

オリンピック体制が確立されていくなかで同時に進められてきた競技者の養成と強化対策に着目し、「オリンピック主義」の下で当時の競技者に求められた役割について考察した。

戦後の日本にとって、スポーツに限らず重要な契機となった東京オリンピックでは、競技者の養成、強化に一層の努力が要請され、東京オリンピック選手強化対策本部の選手強化策や自衛隊体育学校の協

力によって、選手にはオリンピックにおける勝利が強く求められた。

円谷が競技成績を飛躍的に伸ばしたことには、本章で考察してきた選手強化対策本部や陸上競技連盟による選手強化策、自衛隊体育学校の果たした役割が大きかったといえる。それを裏付けるように、記録の面では円谷が自衛隊入隊後、特に自衛隊体育学校に入学し、オリンピック強化指定選手に選出されてから記録を伸ばし、海外遠征を経て当時の日本記録を樹立するまでにいたった。

一方で円谷に影響を与えたものは、競技者としての円谷の精神性を規定した選手強化本部の強化策「根性づくり」であった。円谷をはじめとしたオリンピック選手強化は、スポーツ体制や政治権力が求める人間像の育成につながっていたと考えられる。

### 結論

円谷の自死をもたらしたのは、体協主導のスポーツ体制や政治性を特徴とした時代や社会であった。田舎に生まれた円谷幸吉という人間が、競技者として一般社会から隔離され、その時代や社会が求める人間像すなわち国民的英雄に規定されていった。「オリンピック主義」というスポーツ観によって、円谷はこの「国民的英雄」に自己を投影していったのだが、競技者としての限界を自覚した時、それまで抑圧されていた本来の実像としての自己に気づいたのであり、そこへの回帰は死によってしか果たせなかったのだといえる。